叢A
14.5
97
14.5-397
1200501216905

商工資料第二十一號
昭和十年三月

ペルシヤの文化と經濟

—笠間杲雄氏述—

東京商工會議所

立憲民政黨政務調査館
10.3.3
叢A 76 21

始

14.5
397

本編は前波斯駐在特命全權公使(現葡萄牙公使)笠間杲雄氏が昭和十年二月一日當所に於て試みられたる講演の要旨である。

昭和十年三月

帝國圖書館
56.6.
圖書繼續書

81W27187

ペルシヤの文化と經濟

——笠間杲雄氏述——

東京商工會議所

只今鶴見先輩から御紹介頂きましたやうに、私はペルシヤには滿三年居りまして、それから日本に歸らずにポルトガルに參りましたので、私はペルシヤを離任致しましてもう丁度二年程になりますので、少しその事情が古くなつて居ります。勿論統計のやうな書類は讀んでは居りますが、何かお爲になる、御參考になるやうなお話を致したいと思ひますけれども、どうも話が下手なのと、少し聲を二三日前から痛めて居りますし、定めしお聽き苦しいと思ひます。極く要領だけを申上げます。

ペルシヤに參りますのに、誰も一番先に質問するのは、どうして行くか、と云ふことです。この地圖も餘りいゝ地圖でないやうですが、ペルシヤは綠色になつて居りますが、色々行き方はありますが、私が初めて赴任を致しました時には、御承知の初めて公使館を作るに就いて、色々不便な所でもあるので、買物などをする爲に、一先づヨーロッパに行きました。ヨーロッパから逆にモスコーに參りまして、此處で新たに館員になる連中を日本からシベリヤ鐵道で迎へました。其中には日本の外務

省の官制では初めて醫者を、ペルシャの公使館付の醫者を私の主張で連れまして、その醫者の夫婦が參りまして、それからモスコーで丁度先程一寸テーブルでお話がありましたが、當時の十五銀行の成瀬氏の息子が私の親しい友達で、且つ後輩でありましたが、それが私に先だつてモスコーから此處に來て居る、それが非常に重態だと云ふ電報をモスコーで受取りました。出來るなら飛行機でモスコーに連れて行く手配を致しましたが、十二月でありまして、普通は定期の飛行機があるのですが、十二月はやつて居りません。仕方なしに急行列車で、石油の產地である、コーカサスのバクーと云ふ所まで約二十四五時間、今でも毎日急行が出て居ります。その急行でバクーに出て參りました。それがカスピ海、所謂裏海に出て居るロシアの石油の產地です。それが向ふ側の、ペルシャ側の名前が出て居りませんですが、ハワラビー、昔はエンゼリ、今の王朝になりまして、ハワラビー、其處迄船で十七時間、それから都のテヘラン迄陸路を自動車で參りました。それが四百九十五粁ありまして、私はバクーでハワラビーと云ふ所迄飛行機を呼び寄せまして、私の從者、秘書役の家内は私と一緒に飛びました。醫者の妻だの、子供だの、其他の從者は全部陸路でゆつくりして參つたのであります。それが一つの行き方です。然し成瀬子息は三日前迄生きて居りましたが、可哀相なことには、亡くありました。最初のペルシャの犧牲者でありました。

それからもう一つ普通よく行く道は、印度を通りましてボンベー、其處からブシアイア（Bushire）に定期汽船が出て居ります、ボンベー、カラチを經てブシール、英國人はブシアイアと言いますが、其横にマホメラ（Muhammera）、其一番先の港がアラビヤの中に入つて居ります。日本の荷物もバスラ（Basra）迄澤山參りますから、多分御承知と思ひます、バスラからバグダッド迄鐵道があります。昔の御承知のカイゼルの所謂バグダッド鐵道、B・B・B、ベルリン、ビザンチン、バグダッドを繋ごうと云ふ夢の一片の後だけが殘つて居ります。狹軌の鐵道です、バグダッドから自動車若くは飛行機で行きます。陸路で二晩、ブシール、マホメラからテヘラン迄行きます。

西洋から來る者は裏海のバクー、五百哩の先の石油を裏海に出して居ります、それと並行して居ります鐵道がありまして、其鐵道でバクーに來て、私が行つたやうにやるか、シリヤのベールート（Beirut）に上陸して、ベールート、イタリー、フランスなどと通ふ船が澤山ありますから、ベールートからアラビアの砂漠を飛行機、或は自動車で横斷しましてバグダッドに行きまして、それから陸路を行く、さう云ふ行き方もあります。ヨーロッパに行く人は大體ロシアを通ることを厭がる人はさう云ふ經路を通るのであります。私はその經路を二度やりました。飛行機でも、自動車でもアラビヤの砂漠を約四回ばかり横斷しました。ペルシャの國内は大體に於て自動車と飛行機で一通り歩きました。

さう云ふ國で、隨分骨が折れる所でありますが、併しながら非常な生活の愉快な、西洋のオペラとか

キャバレーとか云ふものはありませんが、變つたいゝ所で、第一は氣候がいゝ。有名なペルシャの青空は到底外の國では見られない。綺麗な青空、星の光でも、あゝ云ふ星の光を見たことはない。私だけかと思つたら、外の人も同じやうな感を持つらしいのであります。西洋の詩人、旅行者の紀行文を見ても、ペルシャの星の麗しい、花の匂ひがいゝと云ふことも、さう云ふやうな詩の國、歌の國、古典の國でありますから、非常に變つた嬉しさがある。少し荒つぽい、私は少しは、いから、のやうでありますが、荒つぽいのが好きでありまして、馬に乘つて鐵砲を打つ、それはペルシャ位いゝ所はない。殆ど名前しか知らない動物が皆生きて居る。獅子は居なくなつたが、虎は今でも居りましたが、不幸にして虎にはぶつかりませんでしたけれども、猪、ワイルド・アース、野生驢馬、狼、鹿、鳥も色々な種類、殆ど當公使館から一時間もドライブしますと、鴨が自然に飛んで居ます。鐵砲を打つには世界有數の所です。それからスキー、キャンプ、英國人などは非常にひどい所にキャンプを夏中やつて居ります。ポロは私は餘り馬は上手でありませんから、それ程やりませんが、何しろそう云ふことを好きな人は非常によい。一番不得手であつたのがゴルフである。其他は何でもやる。

もう一つ愉快な理由は、殊にヨーロッパの大國は第一流の外交官を置く、大體ペルシャ人と云ふものは、古い歴史の國でありますが、強國のみならす、此處に送つて來る外交官は日本を除き非常に有

能の人を置く、例へば今來て居りますイギリスの大使、イギリスでは第一流の人とは思ひませんが、あれが私と一緒にペルシャに來た。今此處に來て居るイギリスの參事官も居りましたけれでも、例へば有名な人では、今モスコーに居りましたドイツの大使、シュレンベルグ、この人が居りました。イギリスでは印度關係で、隨分えらい人を始終送つて居ります。イギリスの外交官で、書物を書いて、後世殘した人は、外交官を勤めた人で、ペルシャのことを書いた人があります。例へばカーズンと云ふペルシャ通の人を見ても、可成り詳しくペルシャの中を歩いた人らしいのであります。其他青年外交官と云つたものが隨分素晴らしい人を送つて居るやうであります。其點は一つ役德と言ひますか、大變學問になる譯であります。

さう云ふ譯で任地としては實に愉快な所ですが、唯多少の風土病があります。それからオペラとか、音樂會と云ふものがありません。

それからペルシャと云ふ國は、改めて地圖の話になりますが、面積で言ひますと、約百六十萬平方粁、即ち植民地、其他全部を合せました日本の領域の約三倍、人口千萬、千萬と言ひますが、少しそれよりは多いだらうと思ひます。詰りセンサスがないのでありますから、はつきりしたものではありませんが、何故多いかと云ふと、賣れます綿布やなんか、あの高から言ふと、千萬の人口には少し多いさうであります。千二三百萬乃至四五百萬ありはしないか、それは專門家の臆說であります。

このペルシャと云ふ國はさう云ふ國で、今日行きますと、物質文明から言ひますと、可成り遲れた國であります。道路はどうにか出來て居ります。例へば電燈、水道、瓦斯と云ふものは大分遲れて居ります。水道はまだありませんが、丁度始まつた位であります。また電氣は私が行きました時には、もう完全に出來て居りました。私が行く前に今申しました成瀨、其前にもう一人、臨時の代表が居りました。多分御承知と思ひます。二瓶と云ふロシア勤務の人は、是はもう辭めて居りますが、この二瓶君の話には、仲々不便だし、電氣がやつと點いた。電流をやつと送るやうになつたが、夜八時になるとランプを消す。それ以上は電力はない。公使館は幸ひに自分で發電所を作つて居りますから、そんな不便はありませんが、町から電氣を買ふ人間は電流が少いから、夕方暗くなると、電氣が點いて居るか、マッチを擦つて見て、あゝもう電氣が來た。明りが來たなあと、マッチを擦つて見ると云ふやうに、如何に貧弱であるか分ります、それが私が來た頃は、それが餘程直つて、マッチを擦る必要はないやうになりましたが、初め十時位にして、其後延びて十二時迄になりましたが、電氣を自分の所でやつて居ない公使館はランプを用意して、是から愈々踊りでも始まると云ふ時になつて、ランプをつけなければならぬ、電氣がなくなる、さう云ふやうな甚だ不便な所でありますが、唯水なんかは大變よくなりました。我々は飲水はイギリスの公使館が昔から古い公使館でありますが、山から直接水を引いて、絶對に病毒なんかもない水を賣つて呉れまして、それを我々は買つて居りました。其内水

道も計畫し、今頃は出來て居るかと思ひます。瓦斯はあの時代にはありませんでした。それだから一寸考へまして、野蠻人の住んで居ると云ふ風に思ひますが、それは非常に間違ひで、行つて見ると分りますが、凡そ世界の最も古い文化の國の一つで、而も其文化の跡は大抵地面の下に埋もれて居るのでありますが、併しながら人間と云ふものは、矢張り文化の花を咲かした面影をもつて居りまして、餘程みやびな人種、東洋人ではありますが、東洋の國を作つたと云ふ意味の東洋人でありますが、御承知の通りアリアン人の先祖であります。有ゆることでヨーロッパがまだ總て野蠻であつた時代に、此國では非常に程度の高い國、例へばアレキサンダーがペルシャ、希臘に入りまして、ペルセポリスと云ふダウリユウスの後繼ぎを破つた、其遺跡が其儘殘つて居る。其宮殿に殘つて居る彫刻のやうなものが下から出て來る。色々な器物と云つたやうなものはアレキサンダー大帝の頃のものでありますから、丁度今から二千三四百年程前の其文明が其儘後を殘して居る。それから詩とか文學と云ふものが起り、古代ペルシャの文字が殘つて居ります。且つ西洋に文字を與へたのは、少くともペルシャ人の子孫であるサンスクリットのダイア語でありますから、今日のヨーロッパ人と云ふものはペルシャ人も印度、ゲルマン人が持つて居つた高い文化の跡が至る所ります人種も混つて居ります、アリアン人にある。自分自身も決して野蠻人と思はない。寧ろ文明人が物質的の文明がヨーロッパ人とするならば、精神的の値打ちのあるものは自分達が持つて居ると云ふ考へで居るやうであります。であるから

日本あたりでもうつかりアフガニスタン、ペルシャ、アラビヤと云ふものを一纒めに、或る程度の野蠻人が住んで居ると云ふ考へを持つて居りますが、それは非常な間違ひであります。我々が行きますと、東洋だと云ふことを感ずる色々な立派なものがある。例へば文字を貴ぶ。支那や我々と同じやうに書いたものはヨーロッパでは殆ど問題にしませんが、ペルシャでは藝術の一つであります。仕事をやる時に、上手なものは、御祐筆と云つたやうなもので、丁度日本の昔のお役所で、字の上手なのが居るやうに代筆をする、勿論タイプライターもありますが、立派なものは矢張りちやんと筆で書く。日本の宮内省の辭令のやうな、私も勳章を貰ひましたが、其勳章に書いてある勳記と言ひますか、と云ふものは非常に綺麗なものであります。昔からさう云ふやうに書を藝術の一つにしてあります。それから例へば雅號なんか、日本では自分で自分の雅號をつけるのであるが、ペルシャでは大抵王様から貰つたもので、今の王朝になつて止めましたが、それでも前の王朝の時代に貰つた色々な名前があります。例へば其當時外務大臣をして、今總理大臣をして居るフルギー、ヨーロッパでは知られて居る學者である政治家でありますが、フルギーと云ふ人はペルシャ人同士が呼ぶ呼び名を聽きますと、ゾカエル・モルクと言つたり、フルガンとか言つて、初め色々に言ふので、分りませんでしたが、よく字を書いて貰ふと雅號である。「國の光」と云ふので、王様から手柄に對して昔さう云ふ號を貰ふ、其號をペルシャ人同志は言ふので、只今日本に來て居ります今の公使の雅號を知りませんが、前の公使

は何かそんなやうな、忘れましたが、同じやうな「國の礎」と云ふ號を持つて居りました。さう云ふ雅號があつたのです。其意味が支那から出たか、ペルシャから出たか分りませんが、如何にも東洋式である。人間の物腰、婦人の動作、物腰と云ふものは、非常に東洋式で、もの優しいのであります。是は婦人が虐待されて、奴隷扱ひを受けて居つた國は、皆婦人が優しいのは當り前で、段々婦人が解放されゝば、女らしさと云ふものがなくなるのは、當り前の話で、賞めたことでないかも知れませんが、我々東洋から參りますと、如何にも我々に近い人種に思ふ。人種學上の人間としては日本と餘程違つて居るのですが、我々に近い風俗習慣を持つて居ります。

古代に於てはどんな文明の國であつたかと云ふことは、是は申す迄もなく、御承知の通り、古代に於ては東の文明と、西の文明が、總て此處を通らなければ、東から西に行き、西から東に行くことが出來なかつた。外に通路がなかつたのであります。世界でペルシャを通つた旅行者の、若くは旅行しなくても、其事を書いた三人の偉人があるのであります。御承知の通り一番古い所で紀元前五六百年と思ひます。ペティ、之が事細かにペルシャのことを書いて居ります。それからずつと降つて支那の後漢の班超、後漢と言へば、西暦後百年乃至百五十年位でありますが、其時に支那から匈奴を追つてペルシャに入つて、ペルシャのことを非常に細かに書いた。後漢書をお讀みになつた方は御記憶と思ひますが、非常に細かに書いて居ります。ペルシャの物産のことを逐條書に書きいて居りますがそれ

が今日何處に行つても同じ物が出來て居るのであります。それから餘程降つて十世紀にマルコポーロ、之は御承知のヴェニスから大陸を横斷して行つた道を書いて居りますが、其時にイエストと云ふ町のことを書いて居ります。其時も絹の產地であつたが、今でも絹の產地で、近所にエズドーと云ふのは今でもあります。斯う云ふ三大旅行家があります。さうしてペルシャを通つて、ペルシャの繁榮を語つて居ります。どうしても支那の文明が西に行き、シリヤ、希臘、羅馬の文明が支那に行く爲に此處を通らなければ、外に通路がなかつた。文化の十字路、文明の交叉點であつた譯であります。それがペルシャを非常に文化を發達させた譯であります。

支那とペルシャとの交通は、御承知の通り非常に古い、年代から言ひますれば周位の時代からあるのでありまして、降つて隋とか、唐と云ふ時代になりますと、兩方で交換した大使、公使の名前も、向ふの宮中に官名も漢文に殘つて居る。記錄も詳しいのでありまして、向ふの官名をペルシャ語を支那で音譯した名前も殘つて居ります。是は今日と同じである、尤もペルシャの皇室と云ふものは、世界に範をなしたもので、例へばダリユウス時代に、ペルシャの王室の百官有志が王樣の傍に坐つて、かしずく有樣は、世界の王樣に模範を示したのみならず、歷史上例へば其後出ましたイスラヘルのキリスト敎がとられた天國の圖面のプランと云ふものは、ペルシャの皇室の形をとつたものだと云ふことは歷史家は考證して居りますが、多分さうであらうと思ひます。支那の宮中の工合もペルシャの皇室の工合を非常に眞似して居ります。役人の名前なんか、分業の仕方も餘程ペルシャから入つて居ります。

日本で知つて居りますもので、ペルシャから確かに來たと云ふものは色々ありますが、雅樂の中の若干は確かにさうである、是は私はどうも餘り其方を詳しく知りませんが、其雅樂の中の西域の何とか云ふ、雅樂の譯の分らない表題がありますが、あれはどうも西域は今は新彊省でありますが、此當時ペルシャは一時はガンジス河からナイル河まで、其領域であつた帝國でありますから、ざつと西域と云ふ中に入つて居ります。色々支那には向ふから來たものがあります。生糸は支那から行つたと云ふことも確かであります。だから此道をローマの歷史家は、ヴイアセリー、「生糸の道」と云ふ、今日我々はそれを自動車で通つたり、飛行機で飛んで行つて居る譯であります。日本にある例へばフルゲーあたりの敎物の中には、ペルシャの織物が二種類あります。佛像のやうなものは勿論あります。

ペルシャは一番初めにドロアス人の宗敎、それから耶蘇敎、其間に佛敎なり、最後にマホメット敎になつた、有ゆる宗敎が悉く此處を通つたので、其意味で佛敎の先輩として、又ペルシャ人の記錄を澤山持つて居ります。殊にペルシャ語の佛典、最近出ましたトハール語がやつと讀み方が知れるやうになつた。日本で度々參りましたシリバンシミーと云ふ人がやつと讀み方を發見したのでありますが、トハール語の佛典をどん〳〵出すやうになりました。それに依つて玄奘三藏（グンゾー、ミンゾー）が言つて居ります漢

名譯の間違をトハール語で分る、立派なものを全部もつて來ましたから、佛教研究書も面倒なしに讀まれます。さう云ふ總て佛教に關係したやうなものは、全部其當時のペルシャから出て居ります。殊に諸君に一番親しい名前を擧げますと、例へば玄奘三藏が來ます初めの經路は、パミールを通つてさうして其當時の大月氏の都、コーチエに着いた、所謂東洋史で我々は親しくして居る名前であります。多分大月氏と云ふ都があつて、大月氏と云ふものは、勿論ペルシャ人である。ペルシャが今日のやうに此方に段々來たと云ふのは、秦の始皇帝のお蔭である。是は申す迄もなく秦の始皇帝が萬里の長城を築いた。今日の長城と場所は違ふやうでありますが。目的は匈奴、即ち之を支那に入れない爲に萬里の長城を築いた。其爲に支那の本部に入れない。匈奴はどうしても其處らに居る民族を西に追ひやらなければならぬ。即ちユーチエンなんかそれであります。其邊迄居つたペルシャ人が悉くペルシャ民族だけでなく、勿論土耳古種の民族も居りましたが、どんどん匈奴に追はれ、さうして段々縮まつて、今日のやうなペルシャに固まつた譯であります。即ち秦の始皇帝がペルシャの領域を決めた次第であります。其佛教のことを詳しく申しますと、非常に面白いのでありますけれども、今日は經濟事情に早く入る爲に省略しますが、唯一つ日本人が知つて居らなければならぬことは、達磨と云ふのはペルシャ人であります。達磨の喋つたペルシャ語のトハール語で、梁の武帝との會話が通じなかつたのは多分支那語が出來なかつたのだらうと思ひます。達磨の傳記、傳說と云ふことは、漢文で

ありますが其佛教學者が西域を横斷して行つた。唯非常に面白いのは、達磨と云ふものは梁の武帝との問答がありますが、色々な記錄で一番むづかしいのは、「如何なるか是正體の第一義」、さうすると「廓然無聖」あれが昔のペルシャ語の詩人とか、先覺者と云ふものが王樣に質問しますと、よく古い字に載つて居ります。あれは普通の會話で、先覺と云ふものは、自分でむづかしく解釋して、碧巖錄も俗語で書いてあるんです。よく都々逸で飜譯すれば、一番分りよいやうな、簡單な支那語である筈のものを、迚もむづかしく、悟りを開かなければ分らないやうにしたのですが、實は大衆に分る程度の言葉であつたに相違ない。それを非常にむづかしく解釋した禪坊主が間違つて居る。達磨がペルシャ人であつたと云ふ歷史家の說明はありませんが、さう云ふやうな譯でペルシャ人であつたことは事實で、さう云ふ譯で日本にも緣がある。

それからペルシャ人は自分勝手に今迄日本の皇室がペルシャから來たんだと云ふことを眞面目に解釋して居ることです。是は勿論嘘だらうと思ひます。其證據と云つて居るのは、皇室の御紋章が先程申しましたダリユウスの宮殿の殘り、ペリセポリスのハムラビーの遺跡、さう云ふ古い宮殿のペルシャの皇室の住居であつた宮殿に殘つて居る此邊の高さの所にずつと菊の紋章がついて居る。それはペルシャの當時はサツサニアン王朝の、少くとも王樣の紋であつたことは確かであつたけれども、此菊は日本は十六弁であるが、色々な幾何學的の體裁と云ふものは、菊の一番簡單な圓を分けて、等分し

ますと、あゝ謂ふ形は最も花の簡單な部類でありますから、それから日本の菊の紋章が來たと云ふことは、ちよつと受取れないのであります。又ペルシャのみならず外の國でもあるのであります。埃及にも、希臘にもある。唯ペルシャだけには澤山ある、又我が高天ケ原はペルシャにあつたと云ふ說は牽强附會で根據がない說であります。唯ペルシャ側の記錄には、其當時の王樣二人が天下を逃れて居る、極東に赴いたと云ふことがあるさうであります。それと御紋章と類似の菊の紋章がある爲に、日本の皇室はペルシャから來た。日本人が偉いのは、即ちペルシャ人の子孫であるからだと勝手に思つて居ります。それは大した間違ひであると私は思ひます。

さう云ふ譯でありまして、支那に行つたもので言ひますと、葡萄と云ふものは支那にペルシャから行つたものである。葡萄と云ふ字が既にペルシャ語であります。古代のペルシャ語で、發音も同じである。枇杷も、柿も、煙草にしても、其通りで、支那語でないのであります。其他胡爪とか色々なものが澤山あります。大體植物學者の原產地を調べた時に、大體今日知つて居る果物は全部出て居ります。支那には葡萄を作ることは敎へたけれども、葡萄酒を作ることは、支那に敎へなかつたか、或は成功しなかつたか、支那にはありません。「葡萄の美酒夜光の杯」と云ふのは今日の言葉で言へば舶來のシャンパン、即ちペルシャから輸入した酒であつたに違ひないが、此酒がペルシャの名前がついて居ります。例へばセレーと云ふ酒は、御承知の通りスペインで出來た極く輕い酒で、セレーのことを

スペインでペレースと言ひ、ペルシャではセラースと云ふ葡萄の產地がある。是は後にアバス大帝と云ふペルシャの十七世紀の大帝がそこに都を作つて、アバス大帝はセラースと云ふ所に離宮を作つたりしたので、此ペレース、今日のセレーと云ふのは、ペルシャからとつた名前であります。先程申しました雅樂も蓋しさうであります。其他支那が先かペルシャが先か分らないのであります。ポロもペルシャがうまいのであります。それから今のチエス、トランプ是が色々な說が澤山ありますが、トランプのキングはペルシャ人の顏であります。即ちペルシャの密畫が澤山出來て居りますが、ペルシャ人の王樣の顏があの通りであります。皇后も其通りであります。西洋の顏をして居ないことは確かであります。矢張りペルシャ人の顏であります。達磨は印度人の顏を書いて居ります。是は傳說に依つて印度人と思つたからで、近頃の歷史家がペルシャ人と云ふことをはつきりさせたのであります。何か古い支那の達磨の顏の一部は印度人の顏が書いてない、ペルシャ人の顏が書いてあつたさうであります。

さて歷史の話を致しまして、大分長くなりましたが、何故此國が今日のやうな……今日は幸ひ持ち直しましたが、デカダンスに沈退して來たかと云ふことは、是は餘程歷史の研究家のみならず、我々日本國のことを考へに入れなければならぬ。ざつと三つ程原因があります。一つは文化の通路が變つ

た。申す迄もなく、バスコダガマが印度に行く航路を發見しまして、こんなむづかしい山を越え、砂漠を越へる必要はない。海から廻つて印度に行き、極東に行けば、隨分簡單に行ける、安全である。こゝに通路を變へた。是は丁度ヨーロッパ戰爭前デアナと云ふ所は非常に交通の要路でありました。併ながら戰爭のお蔭でドイッが破れて、其同盟國であるオーストリーと云ふものは、分裂して弱國となり、成るべく鐵道をデアナを通さないと云ふことにして、戰爭直後デアナは非常に衰へたと云ふこと、同じで、交通が通らなくなつた。

第二の原因はペルシャ人の土地が豐富な物資を以て氣候はよすぎるので、（南は暑いのでありますが）、勉强しないで飯が食へる、生活が出來ると云ふことが、ペルシャ人を怠惰と云ひますか、勉强しない人間にしてしまつたので衰へた。

第三はマホメット教の習慣として婦人と云ふものを虐遇する、一體婦人を虐遇するのは、文明國にはありません。婦人を奴隷扱ひにする、下等に扱つて居る所は必ず滅びます。是はペルシャのみならず總てのマホメット教に於ては婦人と云ふものを奴隷扱ひにして居るが、どうしても婦人と云ふものは男子と平等にしなければならぬ。同一にしては困るが、平等にしなければならぬと思ひます。日本の男女同權と云ふことは、男女同一論であります。男女同一は間違いであつて、平等にしなければならぬ。ペルシャ、土耳古、アラビヤ、印度の若干と云ふものが國が傾いた根本の原因は、婦人を奴隷扱ひにした、以上三つの原因でペルシャと云ふ國は傾いたのであります。

是から經濟の話になりますが、ペルシャは非常に不幸な地勢をもつた國であります。非常に不幸な所にある國であります。どう云ふ譯かと言ひますと、北に御承知のロシア、南に印度を持つて居ります所のイギリスと此二つの國に挾まれて、非常に不幸な存在を續けた國でありますが、經濟的に見ますと、どうしても今日でも北にあるソヴエットの外に行く道がないのであります。さうして北に最も豐富な物資がある、此處にマサンデラン（Mazandaran）、テヘラン（Tehran）、アジエルバイジャン（Azerbaijan）と云ふ、カスピ海に臨む三つの州が最も豐富に物産が出來るのであります。例へば棉花、非常に森林が繁つて、それからカスピ海の周圍には魚がある。有ゆる藥草が出來る。殊に世界に有數な藥草が出來る。石炭、石油もあると云つたやうに、非常に豐富な物資がある所であります。之が外に捌け口がない。まん中は砂漠のやうな國で、それから周圍が非常に高い。大體ペルシャは全國が約三千尺、四千尺のイラン高原であります。其イラン高原の中に又一萬尺の高さの山が數十もあります。即ち其むづかしい交通の爲にどうしても此豐富な物資が北側のロシア側に出る。南に出る譯にはいかない。今日兎に角少しづゝトラックで出したり、駱駝の脊中で昔の方法に依つて出したりして居りますけれども、大部分は昔からロシアに出るから、ロシア人、どうしてもコントロールされてしまふ。うまい汁を吸はれてしまふ。實際に外國に出るとしても、ロシアのトランシットで裏海に出

すとか何とかしなければならぬ。現に諸君の一番分り易いキャビアール、是は非常に高價な食物であります。日本でもよい料理屋で賣つて居りますが、中々本當の上等のものは口に入らない。非常に高い、西洋でも非常に高い値でありますが、あれはロシアのものだと思つて居りますが、あれはロシアのものでありません。ヴォルガにも多少出來ますが、今日ヨーロッパで最上等のものはペルシャのハラミー・ベレリリー合辨會社で製造して、うまい汁はソヴエットの資本にとられて居ります。名前はペルシャの合弁ですが、實はソヴエットの資本を使つて、あれは日本の網を使つて居りますが、實際の利益はロシア人の懐中に入る。それが非常に高い。ロシアの財源の餘程重要なものゝ一つであります。其大部分はカスピ海の此方側に出來ます。そして川が澤山あります。川鮫、スターシャと云ふのが海から川に上がつて子供を生みに行く時を掴へて出す。此間日本に出すと云ふので、非常に高價なのを賣りに來た人間が澤山ありますが、迚もペルシャでやると云ふやうにいかない。あれが非常な財源であります。あれに類したものは澤山あります。例へばサントニン蛔蟲の特效藥、是も日本は全部確かソヴエットから買つて居ります。丁度ペルシャからロシアに近い、トルキスタンに近い、マサンデランの東の此邊があの產地であります。日本に藥草を送つて見ましたが、どうもセレクションが惡いので、ソヴエットがよい所を掴へてうまい汁を吸はれる。唯サントニンを含んだ雜草を賣つて、ちよつと商賣にならない。どうしてもソヴエットに一日の長がある。ロシアにとつては非常に重大なこと

で、ペルシャ側から一億五千萬留の商品を買ひます。而してペルシャに對して約二千五百萬留のものを賣りつけて居ります。ナチス以前の統計でありますが、第一がドイツ、第二がイギリス、第三がソヴエットであります。

それから南では御承知のイギリスがアングロ・パーシアンに油田の特權を持つて居ります。それが段々イギリスがいぢめられて、特權が惡くなつて、ペルシャ側に非常に有利に解決されて、爭ひを起して居ります。最近には御承知の聯盟總會及び理事會で到頭特權はペルシャ側に勝手に取消されて、最後には結局イギリスの不利益、ペルシャ側の利益に終つたと云ふ位にイギリスの勢ひは振はないのであります、併しながら此處に持つて居ります油田は、今でも利益の二割五分を拂つて、五十の石油の坑があります。私は幸ひにアングロ・パーシャンの連中と親しく交際をして居りますので、外國の公使として、初めて私が山の坑の一番ひどい所迄行つて見ました。非常な歡迎を受けて、特別仕立の飛行機で案內して吳れましたが、それは盛んなものであります。其頃は世界の不況で減產して居りましたが、十二三大きな坑を掘つて油を採つて居りました。アバサンと云ふ所はマホメラと云ふ港の横にありますが、其處のリハインスは大變なものである。一つの坑だけでも何百萬噸以上のものが出る、それが幾つでもある。其頃一人の若い青年がイギリスからケムブリッヂかオックスフードを出るとすぐ來る。さうして一生此處に働いてまあ目的とする所は社長にならうとして皆來て居るのであります

す。此處に來て社長にならうと云ふのは五六十人も毎年頭のよいのが來ます。そんなに澤山社長になられても困りますが……

イギリスの油の利權はさう云ふ譯でありますが、さう云ふ經濟的の利權だけでなく、イギリスにとつては寧ろ政治的に非常に重大な所であります。何故かと云ふと、御承知の通りに印度を持つて居るイギリスはイラクとペルシャとを何等かの形で自分の勢力の下に置かなければ、印度は危ぶない。だからイギリスがペルシャの警備に非常に重きをおくのは其處にあります。經濟的に別にイギリスの商品が入つて居る譯ではないのであります。昔入つて居りましたが、今ではそんなに入つて居ない。イラクとアラビヤはイギリスの委任統治で、今日は獨立國であります。殆ど日本と滿洲のやうな關係の所であります。日本の滿洲よりは少し重くやつて居りますが、イラクを自分の自由自在にして居る。其イラクから印度に渡る通路のペルシャと云ふものは、自分のものにしなければならぬ。此處を中斷されたらイギリスは駄目であります、大英帝國の日將に沒せむとすと云ふことがありますが、中々さうでない。隨分下火ではありますが、どうしてまだ全力を此處に傾注して居ります。例へばイギリスの非常に神經過敏な證據と云ふのは、私共が日本の商品を入れる皮切りをやる爲に、ペルシャの實業家と話をつけなければならぬ。度々私はブシール、マホメラ、其中の一部はアングロ・パーシャンの石油坑に私が行きました時はスパイがつく。私がペルシャ語がはつきり分りませんから、公使館に日本の留學生をして居りました若い書記生を連れまして、それで繰込むと云ふと、どうしても私と書記生で日本人は安心して宜い。相手の事業家も日本と何かやらうと云ふのだから、イギリスに對して秘密を守るべき筈であるのに、所が隣に人が聞いて居るか、必ず話が洩れる。私が東京に電報を打ちますと、殆ど同時にイギリスに同じことを通ずる。初め私も分りませんでしたが、ロンドンの御承知のイギリスの商務官が印刷したレポートを出しまして、其中に世間に發表して宜いことだけは、ステーショナリーオフイスを通じて出して、其一節に私の名前が出て、私の話を直接聞いて居らなければ、分らないものが出て居る。序でに申しますが、ペルシャと云ふ國は、列國の非常に利害を持つ國である。政治的に利害は餘程少くなつたが、何しろ色々なことで最も注意すべき所であります。殊にソヴェットはスパイの殆ど交通網にあります。それは他國のスパイが此處に集まつて居ることに依る。であるから彼處では電報を盗まれたり、符號を讀まれたりすることを嚴重に注意しなければならぬ。私が着任する前に、書類を二三回盗まれて居ります。幸ひひどい機密は取られなかつた、電信なんかも安全であつた。併し始終さう云ふことが起ると同時に、イギリスのスパイのシステムと云ふものは精鋭を集めて此處にはびこつて居ります結果、商賣の話をして居つても、東京と倫敦と同時に話を聞いてしまふ。ロンドンは申す迄もなくイギリスの外務省が一番先に聞くと云ふやうに神經質であります。

此頃商賣繁昌の結果、以前は日本の山下汽船が專ら行つて居りましたが、此頃は郵船、商船が定期

航路を出して居ります。御承知のブリティッシュ・インデアの領域でありますから、ちやんと妥協が出來たものと思ひます。イギリスは中々安心をして居りません。先程申しましたやうに、英國は將に日沒と云ふ譯で、ペルシャは近來國權回復運動が着々功を奏して、さうして今の皇帝は五十八歳でありますが、一兵卒から起つた近來のナポレオンと言はれた英明な君主でありまして、まあ殆ど一人でやつて居ると云ふ位な獨裁、且有能の王者でありますす、其皇帝のお蔭で以て着々近世的な設備が出來て、近世的の教育、陸軍、經濟施設、總て進歩しつゝあります。同時に外國の勢力を成るべく止めて殊に昔のソヴエットの持つて居つた勢力は出來るだけ減殺して、同時にイギリスの持つて居つた色々なものは、段々取り戻して、御承知の治外法權は一番早く世界列國から取り戻しましたが、最後にイギリスの持つて居つた印度、ユーロピアンの電信獨占權と云ふものを取消したのであります。其次に持つて居りました發券銀行、イムピリアル・バンクの金券を發行する權利を取上げた。其次にアングロ・パーシアンの石油の權利を取つた。イギリスは聯盟に泣きついて漸く取り止めましたが、條件が惡くなつたと云ふ風に段々勢力を減らして行つた。

其處に新たに進出して公使館を作つたのが日本であります。ペルシャ人は日本を東洋の先覺と思つて居る。それは尤もなことであります。東洋人の中の一つの最も開けた國の日本の進出を實は非常に喜ぶのであります。と云ふ譯は日本は政治的に野心を持つ懸念もないのであります。我々は此土地を貰つても仕方がない。彼等ペルシャ人が治めて呉れと言はれても、迷惑でありますから、其懸念は毛頭ない。即ちヨーロッパ人よりペルシャに對する野心はない。而して東洋人である日本と同じやうに、東洋固有の美點を保存しながら西洋の長を採ると云ふことが、今日ペルシャの建國の精神として居ります。どうかして日本を學びたい。且つ日本の商品と云ふものを非常に歡迎する。

何故歡迎するかと云ふと、一つには幸ひにペルシャには工業らしい工業はない。紡績工場と云ふものが五つや六つありますが、それは知れたものであります。さう云ふ譯で製造工業のやうなものは、非常に幼稚な程度でありますから、日本品の競爭になるものはないのであります。是が日本を歡迎した第一の原因であります。

第二が、日本は東洋に最も秀いでたものを持つて居る。且つ物を安く賣る、政治的野心がないと云ふことで、非常な好意を以て、合辨のやうな形で日本人の會社が出來、貿易が進出した譯であります。さうして私が居りました時に鐵道の技師を一人雇ひ入れて、鐵道の技師長、鐵道大臣のやうな仕事をいきなりやらせたので、餘りペルシャ側の期待通りのことは出來ません。いゝ加減で歸へりましたが、併し翌年マサデランの方まで北百哩、南百哩やつと出來て居る鐵道、それを南北に結んで、北の方の物資をペルシャ側に出す鐵道には幸ひに日本人が實地踏査をしました。元來私の目的は鐵道を架けるよりは物資を調べることになつたのであります。其方の仕事は大體目的を達しまして、可成り詳

細に事情を見た譯なのであります。其日本を歡迎する一端として鐵道の技師を雇入れ、漁業の技師を雇入れて、此處の魚介を悉く調べると云ふことが、私が丁度離任します時に話が纏つて離任しましたが、其後色々障害があつて、實現しないやうであります。併し早晩實現すると思ひます。

さう云ふ譯で品物も買ひたいと云ふので、商人を歡迎すると云ふことになつて居ります。唯御承知の貿易の調節と云ひますか、爲替の管理をやりまして、是は私が居ります際は、非常に嚴格な爲替管理をして、ペルシャから物を買つた人間でなければ、同額の物を輸入出來ない。即ち日本が此處に百萬圓の物を入れる爲には、百萬圓のペルシャの物を買つて欲しい。斯う云ふ建前になつたのであります。幸ひに同じ人間が必ず買つて入れないでも宜い。即ちペルシャの商品を輸出した場合には、其輸出した證明があつて、大體に於て其同額の輸入をする權利がある。是は轉賣出來るのでありますから、詰り輸入權を持つて居る人から輸入權を買つて、日本の物を入れて居る譯であります。それはちよつと二割五分、ひどい時には三割位プレミアムがついて居りますが、それでも交通の不便で、製造が發達しないものでありますから、商品として引合ふのであります。唯人の商品、輸入權を買つていつ迄もやつて居ると云ふことは、矢張り要するに不自然であつて長く續かない。でありますからペルシャの中に買ふものを探すことに骨を折らなければならぬ。是は骨を昔から折つて居る。又日本の實際仕事をして居る連中は實際やつて居る。まあ御承知の一番手っ取り早く行つて居りますのは、棉花と羊毛位なものであります。値の高いものでは阿片がありますが、非常に高價なものでありまして、必しもさう樂に買へるものでない。さうしてペルシャ側が輸出するのは公然の輸出でありますが、輸入する側は阿片の輸入を若干コントロールして居る國を除いては、買ふ譯にいかない。支那は勿論密輸入であります。ペルシャ側は公然の輸出でありますが、入れる方はどうしても秘密になる。國際條約に反いて居る譯ですから、ちよつと簡單に商品と云ふ譯にはいかない。でありますから阿片を除いて、外に色々なペルシャの物資を買ふことを今試みなければならぬ。確か私が聞きました所では、テヘランにあります今の日波貿易會社は非常に損をして物を買つて居る。例へば麥の如きは五萬圓も損をして居る。併し五萬圓損をしても例へば日本の紡績を入れて、其方で十萬圓儲ければ、結局儲かる。斯う云ふ算盤で損をして居る。即ち物を買はなければ、輸入權がないから、さう云ふことになつて居る。それは早晩買ふものを求めて平均させる、所謂片貿易の調節と云ふことをどうしてもやる必要があります。此頃はセメントは殆ど全部日本から買つて居る。初め山下汽船では殆どセメントを運ぶ爲に航路を開いたやうな譯であります、さう云ふ譯で今日は日本に非常に好意を以て、日本の商品を有ゆる意味で歡迎して居るのでありますが、將來考へなければならぬのは其處であります、此處から何か買ふものを研究する、鹽を買ふとか、貝釦を買ふとか、イギリスなんかゞ買つて居りますのは、レーク・サイドにあるホルムース、船底塗料の原料になる砂であります。イギリスばかり買つて

居ります。さう云ふ譯で大分研究は出來て居りますが、まだ日本は買付けには致らないのであります。そんな譯で買ふものは、まだ〳〵ある筈なのでありますが、知識が一通り出來なかつたり、物があつてもちよつと算盤が引合ふかどうか問題であります。

斯の如く今日のペルシヤと云ふものは、今六七百萬圓位の日本との貿易位ですが、行く〳〵は千萬にも、二千萬にも上り得るものだらうと思ひます。殊にペルシヤはアフガニスタン、印度境にある、そちらから入る。此方はイラク、バレスタイン、シリヤと云ふものは、大體同じやうな宗教の人間が住んで居ります。ですからペルシヤに出すものをモデルにして進出する餘地が澤山あると思ひます。もう現にバレスタインは隨分盛んにやつて居ります。土耳古も御承知の通りであります。土耳古も何か買ふ物を見つけなければならぬ狀態になつて居ります。さう私は考へます。貿易關係が成功します一つの要點は、マホメット教と云ふものを研究しなければならぬ。ヨーロッパとかアメリカとか、從來の日本の市場を別にしますと、是から日本の物を買つて呉れて、益々進出の餘地がある新しいマーケットは殆ど全部マホメット教の住んで居る所であります。蘭領印度は申す迄もなく、支那ですらマホメットは非常に盛んである。印度人なんか、宗教を摑へて、宗教を中心にして印度を教化と言ひますか、教育を云ひますか、リードする爲には、マホメット教を摑まへたら宜いと云ふことであります。印度も勿論であります。アフガン、ペルシヤ、トルコ、エヂプト、アフリカの植民地の一部分、ロシアのタタールにも居ります。然るに日本の貿易の當業者は、極く斷片的にマホメット教に進んで行つて居ります。例へば或る部落に對して斯う云ふ柄が賣れるが、此方の部落には賣れないと云ふやうに、同じマホメット教でも、同じ人種でありながら、此方は賣れないと云ふやうなことを、貿易營業者が、斷片的には多少御存知のやうであるけれども、併し全體としてマホメット教のもう少し廣い研究が必要と思ひます。と申しますのは、マホメット教は二つの宗派がありまして、シヤーとスンニーとあります。耶蘇教の舊教と新教とあるやうに、例へばペルシヤと云ふ國はシヤート云ふ宗派であります。土耳古はスンニー、アラビヤは若干シヤーであるが、スンニーも居る。アフガニスタン、タタールはスンニーでありまして、宗教から來た色々な相違があります。波斯で一番出來る製造品はカーペット、是はペルシヤは二千年以上やつて居ります。此頃植物性の色を作つて、昔の體裁を復活させて、昔のやうな優良なものを製造しやうとして居ります。全部手工業であります。非常な搾取をして子供や女をこき使ふ工業であります。古典藝術の最も顯著なあのデザインを見ますと、宗教の區別がつくのであります。御承知のペルシヤで唐草模樣、時としては人間の繪を入れたものすらあるが、是はシヤーで、スンニー派の土耳古は幾何學的なものが多く、コーカサスも同じやうなものが出ますが、花や鳥を入れたものが出來ない。宗教の區別で同じマホメットでありますが、シヤーは進取的に出來て居る。

それから偶像を極端に排斥して、今のマホメット教のスンニーは殊に偶像を嫌つて居ります。鳥や獸の繪さへ入つて居ないと云ふのは、極端なマホメット教の信條から出て居る。シャーの宗派になりますと、少じ變つて來て、ペルシャと云ふ國は大體花の國、歌の國であつて、昔のマホメット教が入る前から審美的藝術を持つて居りますから、シャーの後から來た新教と云ふものは、スンニー派に反對して、丸い譯であります。ペルシャ人が買ふ品物は、さう云ふデザインが幾何學的に曲線とかを畫いたものでないことは、カーペットにもさう云ふことが現れて居ります。さう云ふ宗派の區別をマホメット教では根本に考へると色々なことがある。又信仰上例へば豚を食べない。御承知の通り支那でさへマホメット教は豚を食べない。よく支邦の田舍の地方の宿屋には「清眞回回」と云ふ看板があつて、此方の方は回教である、豚を此宿屋では食べさせない、羊を主として食べさせます。さう云ふ宗派の關係から色々な貿易上の關係をもう少し詳しく研究する必要があると思ひます。歸りまして私は外務省の通商關係の連中にも其事を注意して居りまして、出來るだけさう云ふ方針をとつて居るやうでありますが、まだ中々一朝一夕には參りません。

ざつと斯う云ふことで、ペルシャ人の內部の生活狀態を申上げましたが、大した面白いこともない。先づ大體に於てそれから物質文明から申せば、未開國に近い國であります。妙な一種の文化を持つて居ると云ふことは、先程申しました通りであります。殊に藝術的の溫味を持つて居ると云ふことは、非常なものであります。其藝術的と云ふのは進步的で、日本も進步的な、アーテスティックな非常な天才を持つて居りますが、我國に近頃出來ますビルディングは見つともないと思ひます。殊に官廳藝術は非常に惡いと思いますがマホメット教の中でもペルシャ人は中々藝術的である。例へば召使ひのやうなものでも、人を招びまして、宴會の時に飾ります花びらを撒らしたり、なんかして、非常に綺麗で、ちよつと鉛筆で繪なんかを書かせば、どんな奴でも繪になつたものを書く、殊に意匠、斯う云ふやうなデザインをさせますと、迚も綺麗なものを子供でも、女でも立ち所に書くが、是が同じやうな人間で一緒に住んで居るアルメニヤ人と云ふものを掴へまして、やらせますと、全然違ふ。味が丸でない。矢張り國民の中にさう云ふものがある。今の文字を尊ぶと云ふこと、而も非常によく知つて居る。昔の有名な詩が澤山ありますが、其の詩の文句を短いが、例へばコップをわらしまして、粗忽をしました時に、叱りつけると云ふと、すぐ詩の文句に斯う云ふことがある。であるから私はつかりわらしました。と其詩の文句を出してお詫びをする。街でも乞食が古い詩でも歌ひながら、金が欲しいと云ふやうな、非常に悠長な、さう云ふ意味の文化を持つて居る。それに今日のマホメットの信仰が加つて、教育も寺小屋式でありましたが、現在の皇帝になつてから、殊に教育を盛んにし、今迄でも中學、大學がありますけれども、殊に小學、初等教育が色々まち〳〵で寺小屋式ばかりであつたのが、すつかり統一しまして、字を讀む人間のパーセンテーヂは少いと思ひますが、それでも教

育の基礎は出來て居りません、迚も土耳古程に及びませんが、段々近世的の教育を施し、大體はさう云ふ古い文化を持つた國民でありますから、物を教へ出すと、非常に分りもどん〳〵早い、それに付て電信問題に付てイギリス人を追つ拂つた時に感じた。電信技術と云ふものは、日本では片假名が讀めれば、容易に出來る、技術も簡單なものであるが、イギリスのは中〻さうはいかない。ペルシャ人が電信を全部イギリスから取り上げたつて、出來やしない。其中に又イギリス人を全部雇ふから見て居たまへと云つて居りました。日本の公使館も外務省から來る暗號の電信が來ましたが、下手で困りましたが、ほんの一月程若干不便を感じましたが、始終電信にリフィートが出ましたが、一月位經つと、何等不便がなくなつた。即ち電信事務にあんなに早くペルシャ人があの位何でもなく出來る所を見ますれば、中々さう云ふ意味で侮ることは出來ないと思ふのであります。

まあ大體ざつとさう云ふことでペルシャの話をお終ひにしやうと思ひますが、私共が平常考へて居りますことを、ほんの少し附加へさして頂きますと、どうも我々日本は東洋の盟主であるとか、亞細亞人のリーダーであるとか、威勢のよいことを始終言ひますけれども、實際日本の知つて居る東洋と云ふものは、ほんの極東の一部であつて、もう印度に行くと日本の持つて居る知識と云ふものは非常に少い。アフガニスタンでも、ペルシャ、アラビヤ、土耳古、皆同じ東洋に國をなして居る國民に對して認識を持たない、愛情を少しも持たない、大體私は東洋の民族と云ふものに付ては、昔から非常に關心を實は持つて居る。其爲だけではありませんが、主として其爲に私は自から進んで東洋に行く、ペルシャに行つた譯であります。東洋民族に對する日本人の認識は少しもない。其例は非常に澤山あります、日本が土耳古やペルシャを扱ふ時でも、外交上は大體に於て今日は追隨である。亞細亞の人間に對する時でさへも、決して自主的外交は實はやらなかつた。其邊が同じやうな東洋に國をなして居る人間に對して愛情を持たない。支那人に對してすら愛情が足らない。支那人も足らないと思ふが、我々も足らないと思ひます。日支提携と云ふやうなことも、兩方に本當に愛情があれば、あんなものは解決が樂だらうと思ひます。さう云ふ譯であるから、せめて支那はもう出來て居るけれども、アフガニスタン、ペルシャに我々が公使館をやつと作り出した國でありますから、斯う云ふ人間に對して少し認識を加へて、矢張り日本は東洋のリーダーになり、天から授けられた使命を持つて居ると云ふことを期して居る、それにはもう少し勉强して、是等の人間に親しみを持たなければならないと思つて居ります。（終り）

東京商工會議所刊行

産業合理化資料

號	標題	實費
一	獨逸に於ける合理化運動と獨逸産業合理化協會	(二〇錢)
二	商業標準化事業と其價値	(四〇錢)
三	流動作業に關する經驗	(五〇錢)
四	米國に於ける間接費の研究	(三〇錢)
六	木製包裝の合理化	(三五錢)
七	郵便小包の包裝及發送	(三五錢)
八	輸出取引の仕方	(三五錢)
九	豫算による企業の統制	(三五錢)
一〇	配給の方法	(二〇錢)
一一	事務所の騒音防止方法	(一〇錢)
一二	厚紙包裝の合理化	(三五錢)
一三	包裝用締具及び安全裝置	(三五錢)
一四	米國に於ける恩給制度の研究	(三〇錢)
一五	商品の回轉率と手許在高の統制	(一〇錢)
一六	職長の資格	(三五錢)
一七	卸賣取引方法と其の代金取立に就て	(二〇錢)
一八	筋肉勞働者に對する基礎賃率の決定	(二五錢)
一九	會社の重役及幹事の職務	(二五錢)
二〇	販賣員の訓練	(殘ナシ)
二一	中央配達制度による經費節約	(一〇錢)
二二	産業上の適職選擇	(三五錢)
二三	鋲力製及び金屬製包裝の合理化	(三五錢)
二四	實業界に於ける大學卒業生の採用と其の適所選擇	(一〇錢)
二五	壓縮空氣設備の設計と運轉	(二五錢)
二六	組織及び操作諸原則	(三五錢)
二七	製造業に於ける出資の統制	(二〇錢)
二八	經濟的水平運搬の基礎	(一圓)
二九	手力車輛	(四〇錢)
三〇	販賣配給費の計算方法	(一〇錢)
三一	生産豫算及び手許在高豫算	(二〇錢)
三二	團體的奬勵法と個人的奬勵法	(四〇錢)
三三	不景氣が勞働に及ぼす影響を最小にする方法	(三五錢)
三四	機械的動力傳達裝置	(二五錢)
三五	海上運送用包裝	(五〇錢)
三六	給油の合理化	(五〇錢)
三七	賃銀支拂事務の管理	(四〇錢)
三八	顧客應待の訓練	(五〇錢)
三九	軌道に依らぬ小距離水平運搬	
	第三部(機械的運轉の運搬車輛)	
四〇	圖表計算	(四〇錢)
四一	最新自動車修繕工場	(六〇錢)
四二	營業費の豫算作成に就て	(四〇錢)
四三	機械の輸出販賣に就て	(二〇錢)
四四	原價計算の基礎案	(四〇錢)
四五	住宅の熱消費の研究	(五〇錢)
四六	統一簿記—機械製造工場用—	(一圓)
四七	經濟性の計算方法	(一圓)
四八	營業用輕便運搬設備	(三〇錢)
四九	工程管理	(五〇錢)
五〇	工場に於ける寸法の測定法	(五〇錢)
五一	特殊計算尺	(五〇錢)

(當所刊行物御希望の方には實費頒布致しますし・當會議所
(振替口座東京一六七九一番を御利用下さい(送料不要)

東京商工會議所刊行

商工調査

號	標題	實費
六	商工審議會の議題に對する意見	(三五錢)
七	健康保險法改正意見並に參考資料	(六〇錢)
八	中小商工業の金融逼迫に關する資料	(一〇錢)
一〇	東京市及び其の附近に於ける家内工業の情態	(五〇錢)
一一	東京地方電氣料金に關する調査	(二五錢)
一二	株式取引所限月問題に關する調査	(六〇錢)
一三	保證準備擴張問題に關する參考資料	(三〇錢)
一四	金輸出解禁に關する參考資料要項	(一〇錢)
一七	中央銀行の組織及金融市場との關係	(二〇錢)
一八	支那改訂輸入稅率表	(二五錢)
二〇	中小商工業金融と我國金融機關の現狀	(三五錢)
二一	我國に於ける百貨店對小賣商問題に關する調査	(三〇錢)
二九	歐洲戰後本邦貿易の趨勢	(四〇錢)
三〇	配當課稅問題に關する參考資料	(三〇錢)
三一	國民負擔輕減に關する參考資料	(一〇錢)
三三	購買組合に關する調査	(三〇錢)
三四	不正競爭の取締に關する調査	(四〇錢)
三五	海外市場需要本邦商品調査	(二五錢)
三六	我國に於ける生產並販賣の統制現狀	(二五錢)
三七	中華民國新舊關稅率對照表	(二五錢)
三八	解雇手當に關する調査	(二〇錢)
三九	最近世界海運狀況	(四〇錢)
四〇	賠償及戰債支拂猶豫問題と世論	(二〇錢)
四一	英獨失業保險法とその實施狀態	(二〇錢)
四二	最近英國及獨逸の財政狀態	(三〇錢)
四三	獨佛兩國の爲替管理並資本逃避防止に關する法令	(七〇錢)
四四	金本位制停止後の英國財界	(三〇錢)
四五	各國爲替管理令	(一圓)
四六	購買組合の受くる寵遇と商工業者の蒙る壓迫	(一五錢)
四八	インフレーションに關する調査	
	第一卷（墺國諸產業に及ぼしたるインフレーションの影響）	(二五錢)
	第二卷（大戰中獨逸に於けるインフレーションの情勢）	(二五錢)
	第三卷（佛國のインフレーションとフラン貨の安定）	(六〇錢)
	第四卷（インフレーション時代に於ける利益配當の方法）	(一五錢)
	第五卷（貨幣價値下落期に於ける賃金調達と價格決定の方法）	(二〇錢)
	第六卷（假裝利益に對する課稅方法）	(三〇錢)
	第七卷（大戰後獨逸に於けるインフレーションの概觀）	(二五錢)
五〇	獨逸に於ける新カルテル法令と價格取締令	(殘ナシ)
五一	獨逸小賣商保護法及關係法規	(一〇錢)
五二	伊太利に於ける公衆販賣業並行商取締に關する法規	(二〇錢)
五三	英國植民地の織物輸入割當制	(七〇錢)
五四	新興產業に關する調査	(二五錢)
五五	輸出統制の改善問題	(一〇錢)

（所議會商工東京・すまし致布頒費實はに方の望希御物刊行所當）
（振替口座東京一六七九一番を御利用下さい（送料不要））

国立国会図書館

東京商工會議所刊行

商工資料

一 米國最近の經濟情勢（關田三朗講演）殘部無シ
二 我國の新興產業に就いて（天野健雄講演）（五錢）
三 人絹工業の近狀（佐羽太三郎講演）（十錢）
四 日歐貿易關爭（竹内謙二講演）殘部無シ
五 躍進する我國の羊毛工業（楠本吉次郎講演）（五錢）
六 統制經濟と獨占（竹内謙二筆）（十錢）
七 日本セメント工業發展史（諸井貫一講演）（十錢）
八 世界經濟彙報—第一輯—（二十錢）
九 我國製粉業の發達（加藤德雄講演）（十錢）
一〇 シカゴ市に於ける交通統制の經過（二十錢）
一一 日本經濟最近の動向（竹内謙二講演）（五錢）
一二 セメント工業の現在及將來（五錢）
一三 我國莫大小工業の發展性（十錢）
一四 珐瑯鐵器工業の進出（五錢）
一五 西藏の資源と邦品進出の可能性（多田等觀講演）（十錢）
一六 海外に雄飛する日本陶磁器工業（十錢）
一七 最近に於ける自轉車工業の發展（五錢）
一八 輸出進展を續くる日本電球工業（北地鎌次郎講演）（五錢）
一九 朝鮮經濟事情に就いて（穗積眞六郎講演）（十錢）
二〇 最近の中南米經濟事情に就いて（首藤安人講演）（十錢）
二一 ペルシヤの文化と經濟（十錢）

東京商工會議所刊行

定期刊行物

	實費
景氣時報（月刊）	（十錢）
東京物價月報（月刊）	（十錢）
重要經濟統計月報（月刊）（三十五錢）	
世界經濟統計（年四回）（二十五錢）	
東京商工會議所統計年報（昭和八年度）（二圓）	
中華民國外國貿易年表（昭和八年度）（六十錢）	

近刊

商工年鑑	（昭和九年度）
中華民國及滿洲國貿易年表	

昭和十年三月二十五日印刷
昭和十年三月二十九日發行
【實費金十錢】

東京市麴町區丸之內三丁目十四番地
東京商工會議所
發行人 天野健雄

市京市京橋區京橋二丁目八番地
印刷人 小柴與三郎

東京市京橋區京橋三丁目八番地
印刷所 若松印刷所

東京市麴町區丸之內三丁目十四番地
發行所 東京商工會議所
電話丸之內(23) 三五・三六・三七 三八・六五
振替口座東京一六七九一番

終